

小学校教員とスクールカウンセラーの 協働プロセスに関する質的研究

教育学専攻教育臨床心理学コース 3615006 松本久香

I. 問題と目的

2015年文部科学省は「チームとしての学校」の答申を出し、スクールカウンセラー（以下、SC）を全公立小学校に配置する方針を示した。教育界にも多職種協働の潮流は広がっている。中学校における教員とSCの協働に関する先行研究はあるが（吉村，2012），小学校における学術的知見は少ない。本研究は，SC経験の浅い小学校教員とSCがいかに協働を模索しているのかを探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

A県の，SC配置歴6年以下の小学校勤務の教員6名を第I研究の対象とし，別の小学校に勤務するSC4名を第II研究の対象として，2015年10月から2016年4月にかけて，1名当たり50～90分程度の半構造化面接を実施した。事前に質問紙による予備調査を行い，インフォームド・コンセントを得た上で「印象に残る一事例」を語ってもらい，協働の具体的なプロセスや主観的な思い，課題を聴取した。録音した内容を全て逐語化しデータとした。分析方法にはグラウンデッド・セオリー・アプローチを援用し，段階的に抽象度の高い上位カテゴリーの生成を行った。

III. 結果

小学校教員とSC，それぞれのデータから80個の下位カテゴリー，37個のカテゴリー，15個のカテゴリー・グループ（以下，CG）が生成された。プロセスを考慮してカテゴリー関連図が作成された。

IV. 考察

1. SC配置歴が浅い小学校においては，「入る側（SC）」と「受け入れ側（教員）」には意識の差が存在していることが確認された。教員側は校内での啓発活動などを通してSCを知る努力をすること，一方SCは自身の活動の可視化を図ることが，相互理解とSC活動促進に役立つのではないかと考えられる。
2. SCは子どもと教員の援助ニーズを把握した教育相談活動に精通するキーパーソンかコーディネーター（窓口担当教員）を求めている。誰が仲介役を果たすかは協働の成否の重要なポイントとなることが示唆された。また，協働においては，年齢や性別，専門性と立場を超えた対等な関わりと対話が重要であることも示唆された。
3. 教員は子どもとSCの距離に注目して子どもをSCにつなぎ，SCとの情報共有を重要視していることが確認された。小学校特有の子どもと担任の結びつきの強さが背景にあると推測できる。SCには子どもや教員との距離を縮めることに努め，学級担任の責任や負担を分け持つ必要性に十分配慮することが求められる。

V. 引用文献

吉村隆之（2012）. SCが学校に入るプロセス. 心理臨床学研究, 30（4）, 536-547.